20210214レムナント教会1部

**救いの正体(キリストの贖い)(創世記22:7-14)**

　私たち信者に正しい救いの確信さえあれば、自分自身がどんなに弱さを抱えていても、その弱さを乗り越え勝利できるようになります。また、どんな険しい現実が待ち構えていてもそれに十分打ち勝ち、勝利の道、契約の道、世の中の人とは違う聖なる道を突き進むことができるようになります。このことがよく分かっているサタンは、信者の攻撃のポイントを救いの確信を揺らすところに絞って攻撃をしてきます。ですから、信者の私たちは、何より聖書を根拠にして、何が救いなのかを正しく理解していかなければなりません。そして、それに基づいて自分は救われたのだという事実を明確に確認し、救いの確信の上に立たなければいけません。ということで今日はイサクを通して、神様が私たちに与えられた救いはどんなものなのかということを考えていきたいと思います。

　ある日、神様がアブラハムに現れて「あなたの子、イサクをわたしにいけにえとしてささげなさい」と命じられました。アブラハムは文句ひとつ言わずに、また家族と相談もせずに、イサクを連れてそのいけにえをささげるためのモリヤ山というところに行きました。途中でイサクが、いつもと少し様子が違うので「他はすべて揃っているのに肝心ないけにえが見えません。羊はどこにあるのでしょうか」と尋ねました。そのときアブラハムが「それは神様が備えられる」と言って、その山に到着するとイサクを縛り、イサクを全焼のいけにえとしてささげようとしました。それで刀を持ってイサクを殺そうとしたときに、御使いの声が聞こえてきました。「やめなさい。あなたの信仰が分かった」。そして、そのイサクの代わりに後ろの藪に引っかかっていた雄の羊が備えられていたので、その雄の羊をいけにえとして神様にささげました。それから、そこをアドナイ・イルエと呼ぶことになったと聖書には書いてあります。

これを通して、神様が私たちに与えられる救いは、

1.絶望的な罪人を助け、その罪人を生かす神様の恵みの働きなのだということが分かるようになります。

それを理解する為に、人間がどれほど絶望的な存在、罪人なのかということを聖書を通して正しく理解して確認する必要があります。それが一番明瞭に記されているところがエペソ2：1です。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」。人間は根本的に死んだ状態であり、つまり神の祝福、神のいのちから根本的に絶たれている存在、根本から絶望的な存在だと聖書は証言しています。その根本のゆえにエペソ2：2には、空中の権威を持つ支配者、悪魔、サタンに従うしかないとあります。だ罪を抱えて人間は、サタンに従う本性をもっている存在だと聖書は語っています。これが人間というものです。ですから当然、エペソ2：3にありますように、生まれながら神の御怒りを受けるしかない、滅びの運命を抱えて、そこから抜けることができないまま、その人生を歩く存在なのです。これが聖書の証言です。人間はこのように根本的に、また本性そのものが、そして、結論までが絶望的な存在です。これが特別な悪い人の話のように思うかもしれません。けれども、残念ながらローマ3：23には「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」とあります。一人も例外なく人間であれば皆、全員、形、外見がどうであれこのような絶望的な存在なのだということが聖書の教えです。

これを確認するために神様に選ばれて、神の祝福の中を歩いてきたイスラエルのことを聖書を通して確認していきましょう。

イスラエルは、他の国の人々と比べてとても有利な条件をたくさん与えられていた民族です。そのイスラエルに対して聖書は、出エジプト19：4で「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に載せ、わたしのもとに連れて来たことを見た」と語っています。このように扱われていたのがイスラエルという国です。それから、申命記32：10-11を見ても「主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだき、世話をして、ご自分のひとみのように、これを守られた。鷲が巣のひなを呼びさまし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に載せて行くように」とあります。このようにイスラエルは神様によって扱われていました。なんと幸いな民族だったでしょうか。

にもかかわらず、そのように扱われていたイスラエルがどのように評価されたのか、ということが聖書に記されています。イザヤ1：2-6「天よ、聞け。地も耳を傾けよ。主が語られるからだ。「子らはわたしが大きくし、育てた。しかし彼らはわたしに逆らった。牛はその飼い主を、ろばは持ち主の飼葉おけを知っている。それなのに、イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。」ああ。罪を犯す国、咎重き民、悪を行う者どもの子孫、堕落した子ら。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。あなたがたは、なおもどこを打たれようというのか。反逆に反逆を重ねて。頭は残すところなく病にかかり、心臓もすっかり弱り果てている。足の裏から頭まで、健全なところはなく、傷と、打ち傷と、打たれた生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてももらえない」。というのが特別に扱われていたイスラエルに対しての神様の評価です。それから、イザヤ41：14には「虫けらのヤコブ、イスラエルの人々」と言われています。同じイザヤ書64：6には「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます」。これがイスラエルに対しての神様の評価なのです。よその国、よその民族より有利な条件がたくさん与えられていたのにも関わらず、イスラエルはこのようになるしかありませんでした。エレミヤ32：30-32には「なぜなら、イスラエルの子らとユダの子らは、若いころから、わたしの目の前に悪のみを行い、イスラエルの子らは、その手のわざをもってわたしの怒りを引き起こすのみであったからだ。──主の御告げ──この町は、建てられた日から今日まで、わたしの怒りと憤りを引き起こしてきたので、わたしはこれをわたしの顔の前から取り除く。それは、イスラエルの子らとユダの子らが、すなわち彼ら自身と、その王、首長、祭司、預言者が、またユダの人もエルサレムの住民も、わたしの怒りを引き起こすために行った、すべての悪のゆえである」。これがイスラエルという国なのです。そして、それをすべてまとめて新約時代のステパノがイスラエルの人々の前でメッセージを語るときに、このようにまとめて整理しています。使徒7：51-52「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者がだれかあったでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました」。イスラエルがどのような国だったのか、今現在はその悪をどこまで極めているのかということをステパノがここで述べています。これがイスラエルに対しての神様の評価、また事実です。

そして、そのときに私たちのような人々はどうだったのかと言いますと、エペソ2：12「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした」。神様から有利な条件をたくさん与えられていたイスラエルの評価は最悪でした。しかし、そのとき私たちは、そのようなイスラエルの外にいた者であって、それよりもよりダメだったという証言なのです。これが人間の実情であり、どれほど人間が絶望的な存在なのかということです。そのとき私たちは詩編14篇に書いてあるように、「神はいない」と堂々と主張しながら、誇り高く生きていた異邦人だったのです。なので、人間のレベルや外見の違いなどはいろいろあるかもしれませんけれども、それは人間の方から見て評価して判断するだけのものであって、神様がご覧になったときには(聖書に基づく)パウロの証言のようにすべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない、義人はいないひとりもいない。絶望的な存在であることには違いはありません。ですから、人間というものは、自ら全く希望が持てない、絶望的な存在なのです。人は自分が努力すれば変わるだろうと、どうにか人生良い方向に行くだろうと思います。お金さえあれば人生は変わるのではないか。技術を持っていれば技術が発展すればこの世界は変わるだろうと希望を持っているかもしれません。今現在もそのように頑張っています。しかし、人間には希望などはありません。それが歴史を通して証明されている正直な事実です。誰一人認めようとしません。それが人間の本性、罪というものですが。しかし、信者の私たちは、この聖書の証言を聞き、人間がどれほど絶望的な存在なのかについてうなずく恵みに預かるようになった者です。なので人間がこのようにすれば、あのようにすればよくなるだろうというのは人間の話であって、そのような希望などは実はありません。絶望的な罪人なのです。最後の最後は、へブル9：27に証言されているように「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」、さばかれる運命、滅びる運命を抱えて抜けられないまま人生を歩いている絶望的な、悲しい存在が人間だということを正しく理解しないと、神から与えられている救いが正しく理解できません。ですから、救いは絶望的な罪人を助ける神様の恵みの働きなのです。これが救いの正体です。

　ですから当然、

2.神様の救いというものは、罪人のために罪のない神の御子イエス・キリストが身代わりとしていけにえとなられることによって、ただで与えられる神様の祝福なのです。

これが救いの正体です。今日の聖書は、イサクが死ぬべきなのに、イサクの代わりに雄の羊が犠牲になっていけにえとしてささげられました。神様がその山において備えられたアドナイ・イルエというのは、実はイエス・キリストのことなのです。救いを考えるときに、身代わりとしてイエス・キリストが、私の代わりに、という言葉を忘れてはいけません。その代わりにということを贖いの救いと言います。それ以来、聖書にはもううんざりになるほど(使ってはいけない表現だと思いますが)その話ばかりなのです。代表的には出エジプト12：21-27、エジプトの奴隷だったイスラエルがそこから解放されるために最後の最後に子羊の血を門柱に塗ることによって死の天使がそこを過ぎ越した。そこで助かった。子羊の血が塗られることによって本当は死の天使によって皆殺されなければいけなかったのに、代わりに羊が殺されることによって助かった。だから、この時からこれを忘れないように過ぎ越しの祭りを守りなさいと言われました。民数記21：4-9を見ますと、イスラエルの不信仰によって火の蛇が現れて、皆大変なことになりました。そのときにモーセがお祈りを捧げることによって神様からの指示がありました。青銅の蛇を作って高く上げなさい。その青銅の蛇を見る者は皆助かる。青銅の蛇が代わりに犠牲になることに対して、イエス様ご自身がヨハネ3章においてニコデモとの会話の中で、青銅の蛇が実は十字架で死なれるわたしのことなのだと解き明かしていらっしゃいます。代わりに、身代わりとして、羊が血を流すことによって、本当は絶望的で滅びるしかない私が助かるようになる。これが救いの正体なのです。イザヤ53：5-6には「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた」。これが贖いというものなのです。そのキリストにすべてを負わせることによって、本来自分がさばかれて、自分が罪の代価として殺されなければいけないのに、自分が地獄に行かないといけないのに、身代わりとして羊が殺されるこの贖いの方法によってのみ人間は救いの希望を持つことができるようになります。そして、この預言が成就されて、イエス・キリストがこの地上に来られたときに、バプテスマのヨハネがそのイエス様を指さして大きな声で叫びました。ヨハネ1：29「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」。それがこの方のことだったのだよ。世の罪を背負って、身代わりとなって、罪をきよめられる、その子羊その方だった。それからイエス様ご自身も自らおっしゃいます。マルコ10：45「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」。贖いの代価として。それから、イエス様は預言通り、ご自分が宣言された通り、ヨハネ19：30、十字架の上で身代わりとして全焼のいけにえとなられてすべてを「完了した」と宣言されます。すべてを「完了した」の原語の意味は支払い済みだそうです。すべての代価を払われたということです。その代価は悪魔に払うものではありません。そのように勘違いする学者さんもいますが、神様ご自身が、神様ご自身に対して払うものなのです。正義の神様なので。この救いの正体が分かっていたパウロは、自分の手紙の中でこのように書いています。ローマ5：8、私たちがまだ罪人であったとき、イエス・キリストが十字架で死なれることによって、私たちに対する神様ご自身の愛を明らかにしておられると言っています。へブル10：14「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです」。これが救いの正体です。

　改めて申し上げましょう。救いは絶望的な罪人を助ける神の恵みの働きですが、その方法は罪のない神の御子イエス・キリストが身代わりとしていけにえになることによって、ただで与えられる祝福なのです。これが救いの正体です。

ならば、この救いを考えるときに自分自身に問いかけてみてください。皆さんの救いのために、皆さんがやったこと、行ったことなどあるでしょうか。私たち自分というものが入り込む余地などは何一つ、一ミリたりともありません。これが救いです。身代わりとして、代わりにすべてなさって、それで終えられたことをただで私たちに提供するだけです。救いを考えるときに自分のどうのこうのというものが関係しているでしょうか。全く関係していません。

救いの正体が分かったときに、普段の世の中のルールや法則などでは到底理解できないですし、受け入れられないかもしれません。でも、それが神の法則であり、それが救いなのです。それ以外には救いの方法などはありません。マタイ18章を見ますと、一万タラントを借金している者の話が紹介されています。その一万タラントというお金は、今現在で換算してみると、大体3兆円ぐらいの金額に当たるそうです。その金額がどうのこうのではなくて、一万タラントというのは、人間が返済不可能な額ということを示しているものなのです。なのでその借金の解決は、債権者がチャラにして、なかったことにしましょうということ以外には方法がありません。それでそのようにすべてがチャラになったということが書いてあります。しかし、神様はそれをチャラにするのに、言葉だけでチャラにはできません。神様は正義の神様なので、ご自分の定められたルールがあります。それで、それをチャラにするためにイエス・キリストを代価として払われることにしました。代わりに。私たちには返済不可能なので。それが救いというものなのです。皆さんの中でそれぞれ人間的な条件などを見て比べられるような要素がいっぱいあると思います。それはそれなりにまた意味のあることだと思いますが、救いのことを考えるときに、どちらが偉い、どちらが悪い、どちらが善たるもので、どちらがより悪ふざけなものなのかということなどはありません。誰と何をどのように比べるのでしょうか。絶望的な者なのです。贖いの救い、身代わりとなって代わりにやってくださること以外に希望はありません。これらを認めることを信仰と言います。Ⅰコリント6：20を見ますと「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい」とあります。代価を払われて買い取られｋた。絶対返済不可能な借金を抱えていて、重荷を背負っていたのに、私が知らない内に、誰かさんがその借金を代わりにすべて返済して返済済みにしてその領収書を私に渡されるわけです。私は何もやっていないのに。何も改善したことがないのに。その借金が終わった、救われたという結果だけが私に与えられるわけです。それが贖いの救いというものなのです。だから、聖書はローマ1：17、この宇宙のどこにもない法則、「義人は信仰によって生きる」。この信仰によってというものは、代わりになさったのでただでいただきました。私たちは絶望的です。返済不能ですということの現しが信仰というものです。Only信仰のほかには根拠がありません。ローマ10：13、だれでもイエスの御名を呼ぶ者は救われます。これが救いの正体です。神様から与えられるいのちの祝福は、自分のどうのこうのによって左右される軽々しいものではありません。

　これからはOnlyイエス、Only信仰だけを根拠にして、自分は救われたという確信に立ってください。先週も申し上げましたように、何があっても救いの確信からスタートするようにしましょう。私は祝福された幸いな者なのだ。十字架の贖いによって値なしにただで私たちはきよめられました。それから、永遠のいのちを所有することになりました。その確信を持って、それが感謝に変わり、そして、それを喜び味わう方向に進むようになることを祈りたいと思います。そこに完璧な勝利が備えられていることをぜひ体験していただきたいと願います。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。私たちの小さな頭では到底理解できない、神様の贖いによる救いの祝福を心から感謝申し上げます。どうか自分の小さな思いや自分のどうのこうの、また世の中から言われている様々な法則をすべて無視して、ただ贖いによって身代わりとしてすべてなさって、私には不可能だった救いをただで与えられたことを感謝します。Onlyイエス、Only信仰によって救われた確信の上に固くたって目に見えないサタンとの戦いに十分な勝利者として、堂々と立つことができるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。